

エジプト中王国時代における襟飾りの副葬

— 図像表現との比較から見た副葬品選択の一側面 —

山崎 世理愛

Funerary Broad Collars of the Middle Kingdom in Ancient Egypt:

Consideration in Selecting Grave Goods from Comparison of Unearthed Objects and Iconography

Seria YAMAZAKI

エジプト中王国時代には、様々な装身具が副葬品として利用された。その中で、襟飾りは棺など葬送に関するものに最も頻繁に描かれた。本稿では、出土遺物と図像資料の分析をおこない、襟飾りに見られる副葬品選択の一側面を考察した。その結果、襟飾りの出土墓数は極めて少数で、ごく一部の人々に副葬されていたことが判明し、その出土傾向と政治的な中心地の移動との間には関連性が窺えた。また、襟飾りの理想的な彩色が示されたと考えられる図像表現と近似していたのは、主に王族の襟飾りで、その他は図像表現とは大きく異なっていた。これらのことから、襟飾りの副葬には、王族による厳格な統制が図られていた可能性を指摘した。中王国時代における副葬品選択は、王族による統制のもと一定の制限の中でおこなわれていたと考えられるのである。

キーワード：古代エジプト、中王国時代、襟飾り、図像表現、副葬品選択

In the Middle Kingdom, various personal ornaments were used as grave goods. Among them, broad collars were often painted on coffins and many other funerary objects. This paper aims to reveal selection of grave goods using comparison between unearthed broad collars and iconography. The results indicated that broad collars were closely related to royalty and few people possessed them in the Middle Kingdom. Probably, selectivity and possession of broad collars were influenced by political factors. Moreover, this paper revealed that royal broad collars resembled iconography showing ideal form and colors. Non-royal broad collars were quite different-which suggests that broad collars were obtainable through government distribution channels. In other words, royalty restricted access to broad collars. Therefore it signifies that selection of grave goods in the Middle Kingdom was not performed freely but under state control to some extent.

Key-words: Ancient Egypt, Middle Kingdom, broad collars, iconography, selection of grave goods

1 はじめに

本稿では、エジプト中王国時代に副葬品として利用された襟飾りの出土傾向を分析し、その具体的な様相を明らかにする。さらに、図像資料と比較することによって、襟飾りに見られる副葬品選択の一側面について考える。

エジプト中王国時代においては、地域・社会階層関係なく副葬された物があった一方、一部の被葬者にのみ属した副葬品が存在した。それらには、殻笄や笏、棍棒、短剣などに代表される王権の象徴や「下エジプト王様式の衣装 (Lower Egyptian Costume)」¹⁾ が挙げられる。これらが副葬品として利用された埋葬形態は「宮廷様式の埋葬 (Court type burials)」²⁾ と呼ばれ、多くが王族の埋葬に

該当する。しかし、王族以外に王権の象徴が副葬された例も知られている。したがって、中王国時代の埋葬形態は、大きく①王族の埋葬 (多くが「宮廷様式の埋葬」)、②王族以外の「宮廷様式の埋葬」、③王族以外の一般墓に分けることができる。一部を除いた土器やビーズは、どの埋葬形態からも出土する遺物である。襟飾りに関しても、王族と王族以外双方の墓から出土が確認されている。

襟飾りは、古代エジプトの最も典型的な装身具の一つで、肩から胸を覆う幅広の首飾りを指す。その多くがビーズ製で、紐にビーズが通ったまま出土することもある。また、壁画、葬祭文書、マスク、木棺など様々な媒体に図像あるいは文字として示され、王や神々が身に付けた姿で表

現された例も数多く知られている。これまで襟飾りについては形態分類に加え、被葬者の社会的地位との関係性を模索する研究がおこなわれてきた。そして、王族および高い社会階層に属した被葬者の墓から頻繁に出土することから、襟飾りは特別な意味を帯びていた可能性が挙げられている。しかし、詳細な分析や考察はおこなわれておらず、具体的な議論にまでは至っていない。図像資料についても、十分な考察がされているとは言えない。

以上を踏まえ本稿では、出土遺物と図像資料の仔細な分析・考察によって、中王国時代に副葬品として利用された襟飾りの社会的な位置付けを探る。

具体的には、まず中王国時代の墓から出土した襟飾りの定量的な分析をおこない、出土傾向と社会変化との関連性を指摘する。また、他の副葬品との組み合わせから、襟飾りは王権の象徴に次いで価値のある副葬品の一つとして認識されていた可能性を提示する。次に、マスクと人形木棺に描かれた襟飾りを理想的な襟飾りと捉え、形態と彩色を軸にその表現方法を明らかにする。そして、実際に副葬された襟飾りのうち、王族に属するものは形態・彩色ともに図像表現と類似している一方、それ以外は形態のみ「理想形」に近いことを示す。最後に、襟飾りなど一部の副葬品には王族による統制があった可能性を提示し、中王国時代における副葬品選択の一側面を描出したい。

2 先行研究

ここではまず、古代エジプトの装身具に関する既往研究をまとめ、その方向性を示す。また、中王国時代の装身具利用についてこれまでの分析結果を踏まえて概観する。その上で、装身具の中でも本稿で対象とする襟飾りの先行研究をまとめる。

(1) 古代エジプトの装身具研究

これまで、古代エジプトの装身具に関して十分な議論はされてこなかった。なぜなら、個々のビーズや護符と同様に、それらを組み合わせた装身具自体にも意味はあるものの、本来の形状で出土することが非常に稀だからである(Quirke 2015: 184)。完全形を留めている資料数の少なさが、積極的な装身具研究を妨げる要因となってきたと言える。その結果、現在の装身具研究の方向性としては、①個々のビーズや護符の形状に着目し、それぞれの分類や意味付けをおこなう研究(Petrie 1914; Andrews 1994; Xia Nai 2014)、②定量的な分析に基づかない研究(Aldred 1971; Wilkinson 1971; Andrews 1990; Grajetzki 2014)が主流となっている。②の研究は、特定の図像資料や出土例を挙げて考察するという方法をとっており、装身具の種類・素材の紹介、製作技法の考察、意味の探求などに比重

が置かれる傾向にある。そして、これらの研究では定量的な分析が欠如しているため、地域・時期による出土傾向の違いなど、装身具利用の具体的な様相が不明瞭なのである。

上記のような研究領域が主流となってきた中で、最近ではごく少数ではあるものの、定量的な分析から副葬された装身具と社会との関係性を模索する研究がおこなわれている。V. ガシェ (Gashe) は、第1王朝時代から第3王朝時代に年代付けられるバダリ (Badari) 地域の3遺跡から出土したビーズと護符を対象に、それらの形態や被葬者の性別による副葬状況、通時的な変化について分析をおこなった。その結果、遺跡間の差異を抽出し、ビーズや護符の副葬には「ローカルファッション」が見て取れることを指摘した(Gashe 2007)。ガシェの研究は、限られた資料数の中、詳細な分析によって遺跡間の副葬習慣における差異を論じた点で重要である。しかしながら、首飾りや腕輪を構成していたであろうビーズに関しても個々のビーズとしてしか認識しておらず、装身具本来の性質には迫っていない。

このように、古代エジプトの装身具研究はいまだ蓄積が浅く、十分に分析や考察がおこなわれてきたとは決して言えない状況にある。

(2) 中王国時代における装身具の利用について

古代エジプトでは、王朝時代を通して実に様々な装身具および護符が利用された。壁画には、しばしば被葬者やその家族が装身具を身に付けている場面が描かれ、図像資料からも当時の装身具がいかにも多種多様であったのが窺える。中でも、王族だけではなく一般の人々と神との距離が縮まった中王国時代において、護符の種類は大幅に増加したと指摘されている(Wegner 2010: 124-127)。つまり、神と結びつきの強いシンボルを王族以外の人々が利用できるようになり、護符の意匠として取り入れ始めたということである。また、筆者は以前、中王国時代に年代付けられる18遺跡160基の墓から出土した形状が判断可能な装身具を集成し、装身具の装着部位・形態を基準に分類した(山崎 2015: 62-64)。その結果、様々な装身具が副葬品として利用された中で、特に首に装着する装身具の出土頻度が高かったことが看取された。また、主要な装身具の出土傾向に地域性が見出せた(山崎 2015)。どの地域からも普遍的に一連ビーズ製装身具³⁾は出土するが、それに加えて、北部のメンフィス・ファイユーム地域では襟飾りや幅広腕輪⁴⁾が多く、中部エジプト地域からも襟飾りが多数出土することが明らかになったのである。一方、南部エジプト地域では、高価な素材で製作された一連ビーズ製装身具が主要な装身具であることが判明した。定量的な分析が欠如していた既往研究では把握できていなかったが、実際には多様な装身具が地域ごとに共通する価値基準のもとで

選択され、副葬品として利用されていたのである。

(3) 襟飾りに関する先行研究

ここでは、本稿の分析対象である襟飾りに関する既往研究をまとめる。

襟飾りの利用は古王国時代から始まり、その後王朝時代を通して使われ続ける装身具となった。しかし、先述の通り襟飾りの分析をおこなった論考は極めて少なく、中王国時代の襟飾りに関しては管見の限り皆無に近い。そのような中、新王国時代の襟飾りに使われたビーズの研究として、A. ボイス (Boyce) の論考が挙げられる (Boyce 1995)。ボイスは、それまでのテル・エル＝アマルナ (Tell el-Amarna) の発掘報告書と未報告資料をもとに、ビーズの集成をおこなった。そして、紐を通すためのビーズがペンダントの上下両端に付いているものは、襟飾りに使われたビーズであると分類している (Boyce 1995: 336)。また、彼女によると、新王国時代の襟飾りは、「植物形襟飾り (Plant-form collar)」、「ウセク襟飾り (*We-sekh* collar)」、「護符形襟飾り (Amuletic collar)」の大きく3種類に分けられる (Boyce 1995: 337-339; 馬場・坪野 2005: 65-67)。「植物形襟飾り」は、草花や果物を模したビーズで構成され、通常は蓮の花を象った三角形のターミナル (terminal)⁵⁾ が付属する。この種類は、アマルナ時代に発展を遂げたと言われている (Boyce 1995: 337, 341-342)。「ウセク襟飾り」は、古王国時代にあらわれて以来、最も伝統的且つ一般的なタイプである。円筒形ビーズと雫形ビーズで構成され、付属するターミナルには、半円形あるいはハヤブサの頭部を象ったものが知られている (Boyce 1995: 337)。最後に、「護符形襟飾り」とは、神やヒエログリフ形ビーズなど様々な護符で構成される襟飾りで、中王国時代に最初の例が見られる (Wilkinson 1971: 65-68)。ボイスは、以上のような襟飾りの種類を念頭に置き、テル・エル＝アマルナ遺跡出土のビーズを分類した。しかし、精度の高い集成および分類をおこなった点は大変意義があったものの、対象遺跡が少数であることから、決して網羅的だとは言えない。また、襟飾りを構成した個々のビーズに焦点が当てられているため、襟飾り自体に関する議論は十分にされていない。

さて、中王国時代の襟飾りに関しては、ボイスのような詳細な研究はないものの、主要な出土例から襟飾りの種類や副葬状況に関する言及がされている。最近では、W. グライェツキー (Grajetzki) が中王国時代の襟飾りの種類として、「ハヤブサ頭形のターミナルが付属した襟飾り」、「半円形のターミナルが付属した襟飾り」、「ビーズ製ではなく一枚の金属板あるいは金箔加工された木製襟飾り」の3種類を挙げている (Grajetzki 2014: 119-120)。なお、こ

の3種類はビーズの形状から、全てボイスの分類における「ウセク襟飾り」に該当する。

以上より、襟飾りは複数種類存在したことが分かる。中王国時代には、2種類のターミナルが付属した「ウセク襟飾り」が主に利用されていたようである。しかしながら、既往研究では具体的な出土傾向等は不明瞭なままなのである。

3 目的と分析方法

別稿において筆者は、出土した装身具と箱形木棺に描かれた図像の比較から、装身具の中でも特に襟飾りは社会階層の高い人々に重要視され、一人の被葬者に複数点副葬される場合があることを指摘した (山崎 2014: 125-127)。また、先述した装身具の地域性に関する分析結果をもとに、本来襟飾りは王族の衣装の一部であった可能性を提示した (山崎 2015: 72)。本稿では、装身具の中でも襟飾りに焦点を当て、襟飾りが副葬品として中王国時代にどのように捉えられ、利用されていたのかを分析・考察する。出土傾向や素材の分析に加えて、図像として表現された襟飾りをまとめ、実際の出土遺物と比較することで、両者の共通点と相違点を明らかにする。これらの分析結果から、中王国時代における副葬品選択の一側面を明らかにしたい。これまでの考察で得られた「中王国時代の襟飾りは王族と密接に関係する装身具であり、高位の人々に副葬品として選択されていた」という結論を踏まえると、襟飾りの分布に見られる変化や地域差、使用された素材の違いは、当時の副葬品選択における王族による統制の有無あるいはそのあり方を示す可能性がある。

本稿の分析においては、まず中王国時代に年代付けられる墓から出土した襟飾り (表1)⁶⁾ を対象に、副葬状況、出土傾向、種類の分析をおこなう。対象資料は完全形を留めているものに限らず、本来襟飾りが副葬されていたと推測できるターミナルや紐を通すためのビーズが上下両端に付いた襟飾り用ビーズのみ (図1) も1点の襟飾りとしてカウントする⁷⁾。完全形以外も含めることで、襟飾りが副葬されていたであろう実際の墓数により近い資料数を確保できると考える。

出土遺物の分析に続いて、中王国時代のマスクと人形木棺を対象に、図像として表現された襟飾りの形態や彩色パターンをまとめる。そのためには、襟飾りが描かれた部分が残存しており、状態も良好なマスク・人形木棺を対象とする必要がある。その上、カラーで報告されていなければならない。よって本稿では、この条件を満たすもののみを対象資料とする。これらをもとに、図像表現における共通点および時期・地域による違いを明らかにしていく。そして、図像に示された襟飾りを「理想形」と位置付け、出土

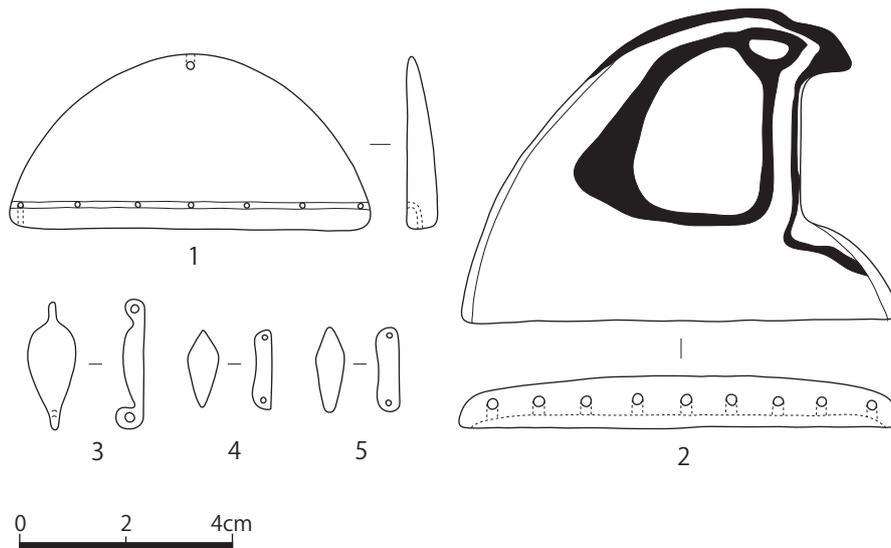


図1 ハラガ遺跡出土のターミナル (1、2) と襟飾り用ビーズ (3、4、5)
(Engelbach 1923 掲載実測図をもとに筆者作成)

遺物との比較をおこなう。

多角的に検討し、中王国時代における襟飾りの副葬について具体的に追究することが本稿の主眼である。特に、襟飾りへの王族による統制の様相を示し、副葬品選択の一側面を描出したい。また、これまであまり活発な議論がされてこなかった古代エジプトの装身具を対象に分析をおこなうことで、装身具研究の可能性を提示することも目標の一つである。

4 副葬された襟飾りの傾向

本章では、中王国時代 (表2) における襟飾りの利用について、実際の出土遺物から検討していく。北部地域 (メンフィス・ファイユーム地域)、中部エジプト地域、南部エジプト地域⁸⁾ に分布する中王国時代の墓 (図2) のうち、襟飾りが出土した墓を対象に、副葬状況、出土傾向、種類の分析をおこなう。

(1) 副葬状況

まず、中王国時代には、襟飾りは誰もが持ち得る器物ではなかったということを指摘したい。なぜなら、メンフィス・ファイユーム地域、中部エジプト地域、南部エジプト地域に分布する18遺跡のうち、装身具が出土した墓数は350基以上にのぼるが⁹⁾、その中で襟飾りが副葬されていたのは、12遺跡のたった85基にしか満たないからである。盗掘の可能性を考慮しても、非常に少ない出土墓数である。本分析では、これら85基の墓から最低93点の襟飾りが確認された (表1)。壁画や彫像などで頻繁に表現されるため、副葬品として広く普及していたかのように見え

るが、図像表現と実際の副葬品との間には明らかに大きな乖離があったと言える。

ここでは、襟飾りの出土位置と性別ごとの副葬状況を見ていきたい。まず、85基の墓から出土した襟飾りは、出土位置が不明なものを除くと、全て木棺内あるいは被葬者が身に付け出土していることが分かった。同様の結果は、グライェツキーによっても指摘されている (Grajetzki 2014: 119)。中王国時代の装身具は、このように木棺内から出土する場合と、木棺外の本箱から出土する場合があるが、前者は副葬を目的として製作され、後者は生前の愛用品であると推測されている (Grajetzki 2014: 119)。この推測が正しいならば、襟飾りは副葬品としての利用が主であったと言える。これは、本分析に用いた襟飾りのターミナル部分からも窺うことができる。襟飾りは、多数のビーズで構成されているため重く、バランスをとるために首の後ろに錘を着けて装着された。したがって、ターミナルの上部には、錘をさげるための穿孔がされているはずである。しかし、本分析において、そのような穿孔が見当たらない襟飾りが13点確認された。これらは、そもそも装着することを想定して製作されていないのであろう。錘自体の出土例も極めて少なく、王族の墓から4点のみ確認された。このことから、中王国時代の襟飾りは日常的に装着する装身具ではなく、初めから副葬品として製作されていたと考えられる。性別ごとの襟飾り出土墓数は、男性13基 (内1基王族)、女性15基 (内6基王族)、子供2基という結果になった。性別不明の墓が過半数ではあるものの、中王国時代の襟飾りは、男女両方に属する装身具であったと言えるのではないだろうか。

表 1-1 本稿で扱う中王国時代の襟飾り (筆者作成)

遺跡名	出土番号	性別	時期	形態分類	色・素材による分類	出土状態	使われている素材	備考	参考文献
サッカラ、 テティ ピラミッド墓地	HMK30	-	アメ1	A-1	a	完形	紅玉髄、金箔加工された木、 施釉凍石	-	Firth and Gunn 1926
	HMK6	-	中王国前半	-	-	-	ファイアンス	-	Firth and Gunn 1926
	HMK26木棺B	-	中王国前半	A-1	a	完形	金箔加工された木、 施釉凍石	-	Firth and Gunn 1926
	"	"	"	A-3	-	完形	金属あるいは木	-	Firth and Gunn 1926
	HMK69	-	中王国前半	A-1	b-1	完形	ファイアンス(黒、青)	-	Firth and Gunn 1926
	129B	F	中王国後半	-	a	完形?	金、ファイアンス、石	-	Firth and Gunn 1926
	129C	F	中王国後半	-	-	完形?	ファイアンス	-	Firth and Gunn 1926
118	C	中王国後半?	A-1	b-1	完形	ファイアンス(青、緑)	-	Firth and Gunn 1926	
ダハシュール	アメンエムハト2世 ピラミッド 複合体内、 イタの墓	F	アメ3	A-1	a	完形	紅玉髄、ラピスラズリ、トルコ石、 銀	王族、「宮廷様式の埋葬」	de Morgan 1903
	アメンエムハト2世 ピラミッド 複合体内、 ケンメの墓	F	アメ3	B	a	完形	金、ラピスラズリ	王族、「宮廷様式の埋葬」	de Morgan 1903
	アメンエムハト2世 ピラミッド 複合体内、 イタウエレトの墓	F	アメ3	A-1	a	完形	紅玉髄、ラピスラズリ、トルコ石、 金	王族、「宮廷様式の埋葬」、 鍍あり	de Morgan 1903
	アメンエムハト3世 ピラミッド北側の シャフト (ホルの西隣)、 ヌヘテフテティの墓	F	13王朝初期	A-2	a	完形	複数種類の準貴石	王族、「宮廷様式の埋葬」、 鍍あり	de Morgan 1895
	アメンエムハト3世 ピラミッド北側の シャフト、ホルの墓	M	13王朝初期	A-2	a	ターミナル	紅玉髄	王族、「宮廷様式の埋葬」	de Morgan 1895
	"	"	"	A-3	-	ほぼ完形	金箔加工された木	鍍あり、木製板に金箔加工	de Morgan 1895
	南-	-	セン1	-	-	ターミナル	ファイアンス	-	http://www.metmuseum.org/MMA32.1.235a
	北ピット464	-	セン1~セン3	-	-	ターミナル	ファイアンス	-	http://www.metmuseum.org/MMA15.3.157a,b
	センウセト1世 ピラミッド複合体、 7/26	-	12王朝	A-1	-	ターミナル、襟飾り 用ビーズ、円筒形 ビーズ	ファイアンス	「宮廷様式の埋葬」	Arnold 1992
	センウセト1世 ピラミッド複合体、 19/41 [pit 20?]	-	12王朝	-	-	襟飾り用ビーズ	ファイアンス	-	Arnold 1992
センウセト1世 ピラミッド複合体、 19/41 [pit 20?]	-	12王朝	A-1	-	ターミナル、襟飾り 用ビーズ、円筒形 ビーズ	ファイアンス	-	Arnold 1992	
北954D	-	12王朝	A-1	b-1	完形	ファイアンス(黒、白、緑)	-	http://www.metmuseum.org/MMA22.1.247	
南ピット6LP3	-	12王朝	-	-	ターミナル(2点)、 襟飾り用ビーズ、 円筒形ビーズ、 輪形ビーズ	ファイアンス(緑)	ターミナルの形状不明	http://www.metmuseum.org/MMA24.1.99&MMA24.1.100	
セネプティンの墓 (pit763)	F	アメ3	A-3	-	完形	銅、金	王族か王族に非常に近い、 「宮廷様式の埋葬」	Mace and Winlock 1916	
"	"	"	A-2	a	完形 (復元箇所あり)	紅玉髄、金、トルコ石、 ファイアンス	-	Mace and Winlock 1916	
"	"	"	A-1	a	完形	金、トルコ石、 ファイアンス	ターミナルに鍍をさげる ための穿孔無し	Mace and Winlock 1916	
北954F	-	12~13王朝	A-1	b-1	完形	ファイアンス(黒、白、緑)	-	http://www.metmuseum.org/MMA22.1.249	
北954I	-	12~13王朝	A-1	b-1	完形	ファイアンス(黒、白、緑)	-	http://www.metmuseum.org/MMA22.1.1626	
北954J	-	12~13王朝	A-1	b-1	完形	ファイアンス(黒、白、緑)	-	http://www.metmuseum.org/MMA22.1.1629	
北954L	-	12~13王朝	A-1	b-1	完形	ファイアンス(黒、白、緑)	-	http://www.metmuseum.org/MMA22.1.1632	
北954M	-	12~13王朝	A-1	b-1	完形	ファイアンス(黒、白、緑)	-	http://www.metmuseum.org/MMA22.1.1634	
北ピット627	-	12~13王朝	-	-	ターミナル	ファイアンス(緑)	ターミナルの形状不明	http://www.metmuseum.org/MMA15.3.385	
北ピット451	-	12王朝末~ 13王朝初期	A-1	おそらくb-1	ターミナル、円筒 形ビーズ	ファイアンス(白、黒、緑)	ターミナルと円筒形ビーズは 連なった状態	http://www.metmuseum.org/MMA15.3.122	
北ピット337	-	12王朝末~ 13王朝初期	A-1	-	ターミナル	ファイアンス	-	http://www.metmuseum.org/MMA15.3.68	
"	"	"	A-1	-	ターミナル(2点)	ファイアンス	ターミナルが2点出土してい るため、MMA15.3.68とは別 個体	http://www.metmuseum.org/MMA15.3.67a,b	
北954E	-	13王朝	A-1	b-1	完形	ファイアンス(黒、白、緑)	-	http://www.metmuseum.org/MMA22.1.248	

表1-2 本稿で扱う中王国時代の襟飾り (筆者作成)

遺跡名	出土番号	性別	時期	形態分類	色・素材による分類	出土状態	使われている素材	備考	参考文献
リッカ	A156	-	セン1~セン3	A-2	-	ターミナル	-	-	Engelbach 1915
	A189	-	セン1~セン3	-	-	襟飾り用ビーズ	ファイアンス	ターミナルに紐をさげるための穿孔無し	Engelbach 1915
	A192	-	セン1~セン3	-	-	襟飾り用ビーズ	ファイアンス	ターミナルに紐をさげるための穿孔無し	Engelbach 1915
	A516	-	セン1~セン3	-	-	襟飾り用ビーズ	ファイアンス	ターミナルに紐をさげるための穿孔無し	Engelbach 1915
	A518	-	セン1~セン3	A-2	a	ターミナル	ラビスラズリ	-	Engelbach 1915
	A124	M	中王国後半	A-1	-	ターミナルと円筒形ビーズ	土製	-	Engelbach 1915
ハワラ	ネフェルウブタハの墓	F	13王朝	A-2	a	完形	紅玉髓、金、長石	王族、「宮廷様式の埋葬」、紐あり、最下段の雫形ビーズは1つのビーズが象嵌により3色で表現されている	Farag and Iskander 1971
ハラガ	A 3	F	セン2~アム3	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	A 17	-	セン2~アム3	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	「宮廷様式の埋葬」	Engelbach 1923
	A 58	M/FF	セン2~アム3	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑、ピンク)	-	Engelbach 1923
	A 59	MM/FF	セン2~アム3	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	A 64	C	セン2~アム3	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	A 66	M	セン2~アム3	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	A 70	MM	セン2~アム3	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(青、緑)	ターミナルに紐をさげるための穿孔無し	Engelbach 1923
	A 81	MM/F	セン2~アム3	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(青、ピンク)	-	Engelbach 1923
	A 96	-	セン2~アム3	A-2	-	ターミナル	-	おそらくターミナルに紐をさげるための穿孔無し	Engelbach 1923
	A 104	MM	セン2~アム3	A-1	-	ターミナル、円筒形ビーズ	ファイアンス(青)	-	Engelbach 1923
	A 109	F	セン2~アム3	A-1	-	ターミナル、円筒形ビーズ	ファイアンス(青)	ターミナルに紐をさげるための穿孔無し	Engelbach 1923
	A 110	F	セン2~アム3	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(青、緑)	「宮廷様式の埋葬」	Engelbach 1923
	A 118	MMM	セン2~アム3	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	ターミナルの底部には7つの穿孔	Engelbach 1923
	"	"	"	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	ターミナルの底部には9つの穿孔	Engelbach 1923
	A 133	M/F	セン2~アム3	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	A 143	M	セン2~アム3	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	A 159	F	セン2~アム3	A-1	-	ターミナル、円筒形ビーズ	ファイアンス(青、緑)	ターミナルに紐をさげるための穿孔無し	Engelbach 1923
	A 161	M	セン2~アム3	-	-	襟飾り用ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	B284	-	中王国後半	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	B320	-	中王国後半	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(青)	-	Engelbach 1923
B339	-	中王国後半	-	a	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	紅玉髓、長石、ファイアンス(青)	-	Engelbach 1923	
B341	M	中王国後半	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(青)	-	Engelbach 1923	
B348	M/F	中王国後半	A-1	-	ターミナルと円筒形ビーズ	ファイアンス(青)	ターミナルに紐をさげるための穿孔無し	Engelbach 1923	
B 357	M	中王国後半	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(青、緑)	ターミナルに紐をさげるための穿孔無し	Engelbach 1923	
B 377	-	中王国後半	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(青)	ターミナルに紐をさげるための穿孔無し	Engelbach 1923	

表 1-3 本稿で扱う中王国時代の襟飾り（筆者作成）

遺跡名	出土墓番号	性別	時期	形態分類	色・素材による分類	出土状態	使われている素材	備考	参考文献
ハラガ	B 380	-	中王国後半	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	F 67	-	-	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(青、緑)	ターミナルに錘をさげるための穿孔無し	Engelbach 1923
	-265	F	-	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(青)	-	Engelbach 1923
	NZ? 322	-	-	-	-	襟飾り用ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	E 600	-	-	-	-	襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(緑)	-	Engelbach 1923
	E 605	MM/F	-	A-1	-	ターミナル、円筒形ビーズ	ファイアンス(青、緑)	ターミナルに錘をさげるための穿孔無し	Engelbach 1923
	E 614	-	-	A-1	-	ターミナル、襟飾り用ビーズ、円筒形ビーズ	ファイアンス(青、緑、ピンク)	-	Engelbach 1923
ラフーン	908	-	12王朝	-	-	襟飾り用ビーズ	ファイアンス(青)	-	Petrie, Brunton and Murray 1923
	913	-	12王朝	-	-	襟飾り用ビーズ	長石(青色釉)	-	Petrie, Brunton and Murray 1923
	914	-	12王朝	-	-	襟飾り用ビーズ	ファイアンス(青)	-	Petrie, Brunton and Murray 1923
	906	F	12王朝	-	-	襟飾り用ビーズ	ファイアンス(黒、青)	「宮廷様式の埋葬」	Petrie, Brunton and Murray 1923
	186	-	11王朝末～アメ1	-	b-1	報告書によると完形	ファイアンス(黒、青)	-	Garstang 1907
	575	-	中王国前半	-	-	ビーズ	-	報告書によると襟飾りを構成していたビーズが出土	Garstang 1907
	269	-	中王国前半	-	-	ビーズ	ファイアンス(青)	報告書によると襟飾りを構成していたビーズが出土	Garstang 1907
ベニ・ハサン	720	-	中王国前半	A-2	-	ターミナル(2点)、円筒形ビーズ	ファイアンス(黒、青)	-	Garstang 1907
	761	-	中王国後半	A-1	b-1	完形(オリジナルに近い復元)	ファイアンス(白、緑)	-	Garstang 1907
	73	-	中王国	A-1	-	ターミナル(2点)	ファイアンス(青)	-	Garstang 1907
	94	-	中王国	A-1	-	ターミナル(2点)	ファイアンス(青)	-	Garstang 1907
	662	-	中王国	A-2	-	ターミナル(2点)、円筒形ビーズ	ファイアンス(黒、緑)	-	Garstang 1907
デル・エル＝ベルシャ	ジェフティナクトの墓(10A)	M/F	11王朝	A-1	b-1	復元により完形	ファイアンス(青、緑か)	「宮廷様式の埋葬」	D'Auria, Lacovara and Roehrig 1988
メイル	ハビアンクトフィの墓	M	12王朝おそらく後半	A-1	b-1	完形	ファイアンス(黒、青、緑)	「宮廷様式の埋葬」	http://www.metmuseum.org/MMA12.183.12
	''	''	''	A-3	-	完形	金箔加工された木	木製板に金箔加工	http://www.metmuseum.org/MMA12.183.16
アシュート	メセヘティの墓	M	11王朝	A-1	b-1	完形に近い	ファイアンス(白、青、緑)	「宮廷様式の埋葬」	カイロ博物館、El-Khadragy 2007
テーベ	ディール・アル＝バハリ、ピット3	F	11王朝	A-1	b-1	完形	ファイアンス(黒、白、青)	-	Naville 1907
	ディール・アル＝バハリ、ピット4	-	11王朝	A-1	b-1	完形	ファイアンス(白、青)	-	Naville 1907
	''	''	''	A-1	b-1	完形	ファイアンス(白、青)	-	Naville 1907
	シェイク・アブドゥ・アル＝クルナ、ウアフの墓(MMA 1102)	M	12王朝初め	A-1	b-2	完形	ファイアンス(青)	-	Roehrig 2003

(2) 地域・時期による出土傾向

副葬状況に続いて、襟飾りの地域・時期別出土傾向の分析結果を示したい(図3)。

まず、出土地域は圧倒的にメンフィス・ファイユーム地域が多い(71基)。当該地域では、中王国時代を通して出土墓が認められるが、特に中王国時代中頃～後半・第13王朝の出土墓が多いことが分かった(45基)。次いで、中部エジプト地域から多数の出土墓がみられるが(11基)、

中王国時代前半の墓が目立つ(6基)。南部エジプト地域からの出土墓はテーベに限られ、しかも第11王朝あるいは第12王朝初頭に年代付けられる墓からのみ出土している(3基)。以上の出土傾向から、中王国時代の襟飾りは、広い地域で利用されていたものの、地域によってその頻度に大きな差があったと指摘できる¹⁰⁾。

出土傾向を踏まえ、続いて特に出土墓数が多いセンウセレット(Senusret)2世治世以降のメンフィス・ファイユーム

表2 エジプト中王国時代の年表
(Hayes 1953 をもとに筆者作成)

古王国時代	前 2700 - 2150 年
第1中間期	前 2150 - 2000 年
中王国時代	前 2000 - 1650 年
第11王朝後半	
メンチュヘテプ2世	前 2008 - 1957 年
メンチュヘテプ3世	前 1957 - 1945 年
メンチュヘテプ4世	前 1945 - 1938 年
第12王朝	
アメンエムハト1世	前 1939/1938 - 1909 年
センウセレト1世	前 1919 - 1875/1874 年
アメンエムハト2世	前 1877/1876 - 1843/1842 年
センウセレト2世	前 1845/1844 - 1837 年
センウセレト3世	前 1837 - 1818 年
第13王朝	
アメンエムハト3世	前 1818/1817 - 1773/1772 年
アメンエムハト4世	前 1773 - 1764/1763 年
セバクネフェルウ女王	前 1763 - 1759 年
第13王朝	前 1759 - 1600 年
第2中間期	前 1650 - 1550 年
新王国時代	前 1550 - 1069 年

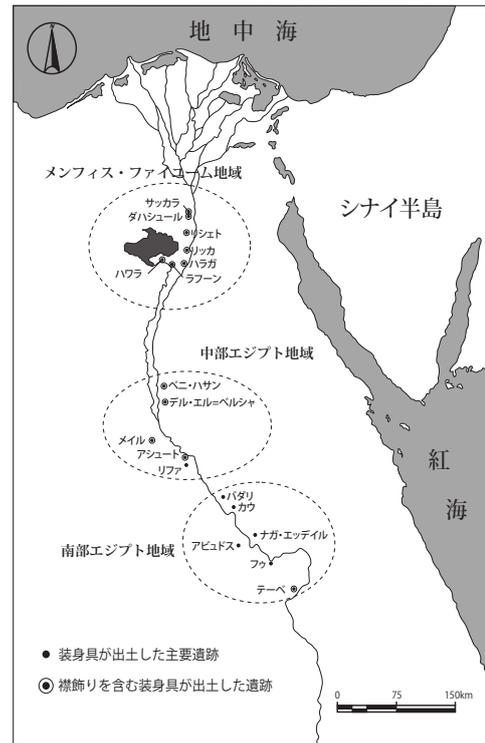


図2 装身具が出土した遺跡を示したエジプト全図
(Baines and Malek 1980 をもとに筆者作成)

ム地域における様相をより詳細に見てみたい。当該地域において、襟飾りが副葬品としてどのように位置付けられていたのかを明らかにすべく、その他副葬品、中でも威信財の役割を担った器物との組み合わせに着目する。そこで、「宮廷様式の埋葬」と呼ばれる中王国時代において最も格式の高い埋葬形態 (Grajetzki 2014) に含まれる「下エジプト王様式の衣装」と穀竿など王権の象徴との共伴関係を確認していきたい。まず、「下エジプト王様式の衣装」と王権の象徴の両方が副葬されたメンフィス・ファイユーム地域の墓は5基存在するが、これらは全て王族の墓である。そして、これら5基からは、必ず襟飾りが出土している。一方、同じく「宮廷様式の埋葬」であっても、王族以外の墓からは「下エジプト王様式の衣装」は出土していない。さらに、これらの墓からは、ほとんど襟飾りが出土しないことが明らかとなった。センウセレト2世治世以降のメンフィス・ファイユーム地域における王族以外の「宮廷様式の埋葬」は19基¹¹⁾ 挙げられるが、その中で襟飾りが出土した墓数はわずか4基だけなのである (表3)。むしろ、「宮廷様式の埋葬」ではない被葬者の墓から出土する襟飾りの方が圧倒的に多い。なお、中王国時代の一般的な装身具である「一連ビーズ製装身具」は、王族、「宮廷様式の埋葬」、その他の墓から出土している¹²⁾。

(3) 種類

93点の襟飾りの中には、ボイスの言う「ウセク襟飾り」と「護符形襟飾り」が含まれる。また、グライエツキーの分類における3種類は全て確認された。両者の分類を踏まえて、本稿では、A-1:「半円形ターミナルが付属したウセク襟飾り」、A-2:「ハヤブサ頭形ターミナルが付属したウセク襟飾り」、A-3:「金属板あるいは金箔加工が施された木製ウセク襟飾り」、B:「護符形襟飾り」の4種類に分類する (図4)。対象資料中には、襟飾り用ビーズしか出土していないため、分類不可能なものが32点あった。これらを除いた種類別の出土点数は、A-1が最も多く (47点)、次いでA-2 (9点)、そしてA-3が4点のみである。Bはダハシュール (Dahshur) に埋葬された王女の墓からのみ1点確認された。この結果を見ると、圧倒的に半円形ターミナルが付属した襟飾りが多いことが分かる (表1)。

A-1とA-2それぞれが出土した墓の時期に目を向けると、まずA-1は中王国時代を通して普遍的に出土している。他方、A-2は1点のみが中部エジプト地域の中王国時代前半の墓から出土し、他は全て中王国時代中頃～後半あるいは第13王朝に年代付けられる墓から出土していることが判明した。したがって中王国時代には、半円形ターミナルが付属した襟飾りが主流であり、ハヤブサ頭形ター

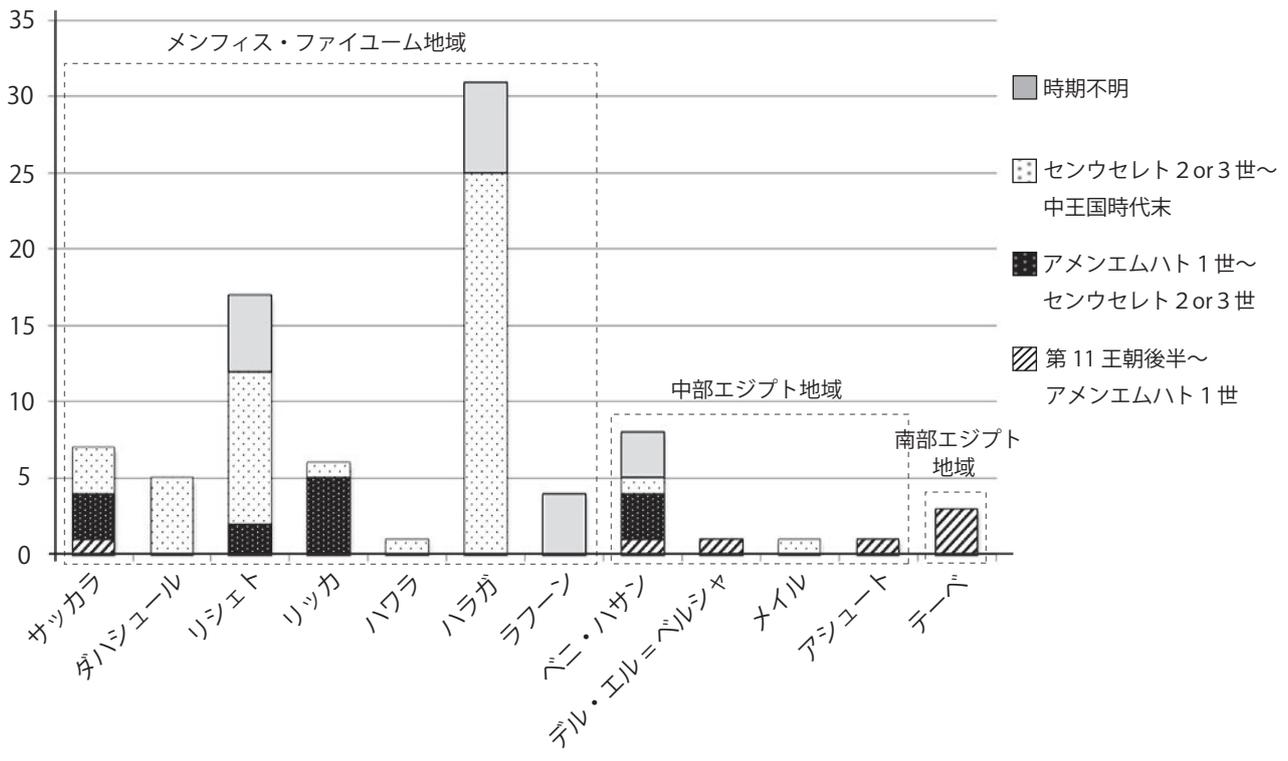


図3 襟飾りの遺跡・時期による出土墓数の変化 (筆者作成)

表3 メンフィス・ファイユーム地域における王族以外の「宮廷様式の埋葬」(+ = 出土あり、- = 出土なし) (筆者作成)

遺跡名	墓番号	襟飾り	「下エジプト王様式の衣装」	王権の象徴	備考
リシエト	センウセト1世ピラミッド複合体、7/26	+	-	+	筆者によって「宮廷様式の埋葬」に追加
	セセネブネフの墓	-	-	+	Grajetzki 2010: 101
	“French Tomb”	-	-	+	Grajetzki 2010: 102
リツカ	A 174	-	-	+	筆者によって「宮廷様式の埋葬」に追加
	A 166	-	-	+	Grajetzki 2010: 102
ハワラ	イウネフェルの墓 (tomb 51)	-	-	+	Grajetzki 2010: 100
	A 17	+	-	+	Grajetzki 2010: 100
	A 110	+	-	+	Grajetzki 2010: 100
ハラガ	B280	-	-	+	Grajetzki 2010: 100
	A49	-	-	+	Grajetzki 2010: 100
	A105	-	-	+	Grajetzki 2010: 100
	A108	-	-	+	Grajetzki 2010: 100
	A162	-	-	+	Grajetzki 2010: 100
	A171	-	-	+	Grajetzki 2010: 100
	608	-	-	+	Grajetzki 2010: 100
	906	+	-	+	Grajetzki 2010: 101
ラフーン	7	-	-	+	Grajetzki 2010: 101
	650	-	-	+	Grajetzki 2010: 101
	905	-	-	+	Grajetzki 2010: 101

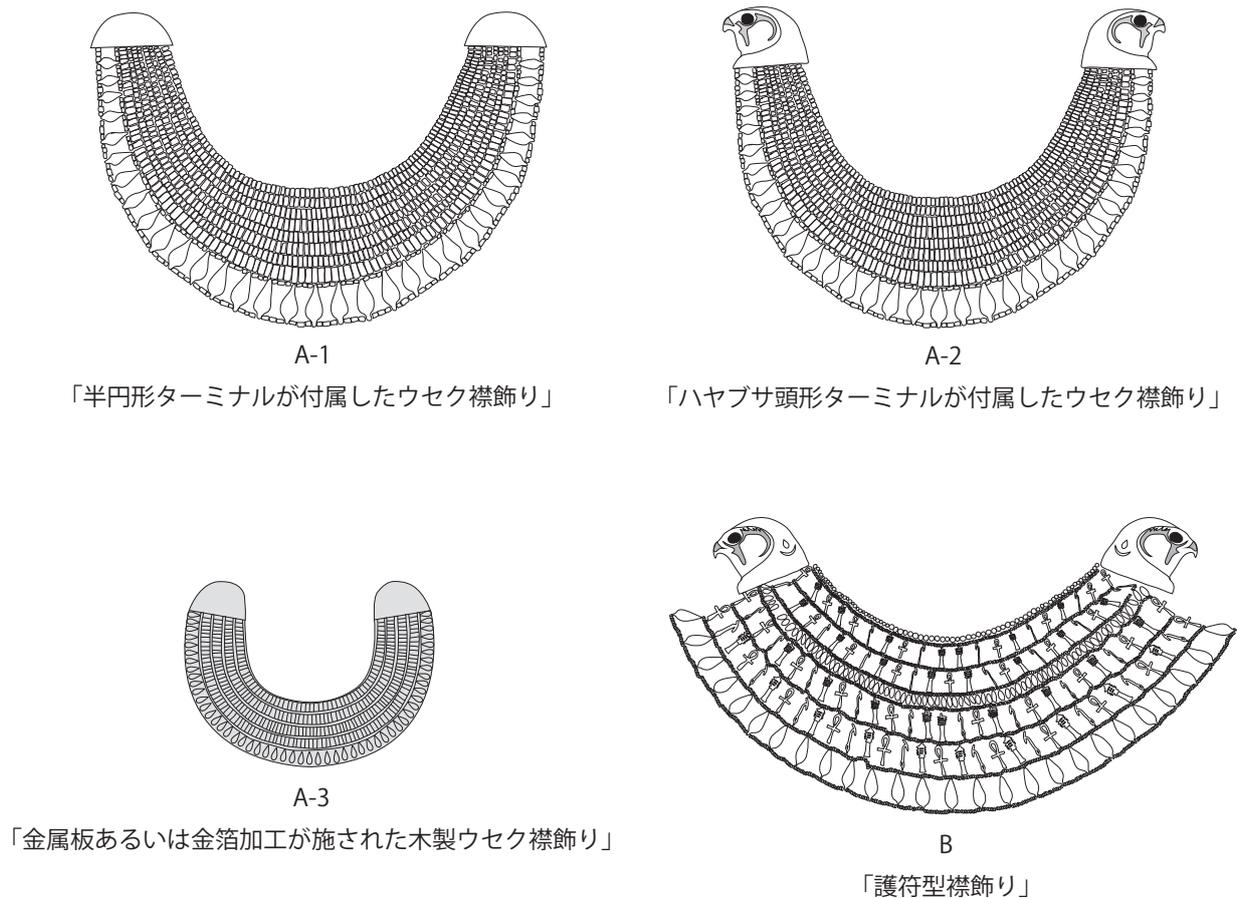


図4 本稿における襟飾りの形態分類
(Mace and Winlock 1916; Aldred 1971 掲載図版・写真をもとに筆者作成)

ミナルが付属したものは、中王国時代末にかけて発展していったと捉えられる。

ここで、墓1基に対する襟飾りの副葬点数とその形態について見ていく。分析の結果、墓1基につき1点の副葬が大半であることが判明した。しかし、中には2点以上の襟飾りが出土した墓もあった。それらは7基確認され、そのうち4基からは形態が異なる襟飾りが組み合わさって出土していることが明らかとなった。たとえば、リシェト (Lisht) 遺跡のセネブティシ (Senebtisi) の墓からは、3点の襟飾りが出土しているが (Mace and Winlock 1916: 64-68)、それらはそれぞれ、A-1、A-2、A-3なのである。おそらく、襟飾りを複数点副葬する場合は多様な種類を指向したのだと考えられる。また、A-3は必ず他の種類の襟飾りと組み合わさって副葬されていた。これは、A-3が付加的に選択される襟飾りであり、あくまで重要視されたのはビーズ製襟飾りであったことを示しているのではないだろうか。

ここまで、襟飾りの形態にのみ焦点を当ててきたが、続いてビーズ製襟飾りに使われたビーズの素材および色に着

目して、地域・社会階層による差異を明らかにしたい。襟飾り全体の配色に注目するため、ここでは完全形あるいはそれに近い襟飾りのみを対象とする。まず、襟飾りを構成するビーズの素材には、準貴石 (semi-precious stone)¹³⁾、金、銀、ファイアンス、長石、滑石が挙げられる。そして、王族の襟飾りには準貴石や金が多用されている一方、王族以外のは総じてファイアンス製ビーズで構成されていることが分かった¹⁴⁾。特に青色や緑色のファイアンス製ビーズが使われる頻度が高い。ただし、テティピラミッド墓地 (Teti Pyramid Cemeteries) 遺跡やリッカ (Riqqeh) 遺跡に埋葬された王族以外の墓からは、準貴石および金製ビーズが使われた襟飾りが数点出土しており、遺跡間で差異があったことが分かる。色に注目すると、王族の襟飾りは様々な準貴石が織り込まれているためおのずと多彩色である。主に紅玉髓やラピスラズリ、トルコ石といった準貴石が用いられており、赤色や青色、青緑色が目立つ。さらにこれらの襟飾りには、金製ビーズやターミナルも多用された。ファイアンス製ビーズで構成された襟飾りは、複数色のものと単一色のビーズで構成さ

れたものに分けることができる。たとえば、テティピラミッド墓地遺跡やリシエト遺跡からは2色や3色のファイアンス製ビーズが使われた襟飾りが多数出土しているが、テーベ (Thebes) にあるウアフ (Wah) の墓からは、青色ファイアンス製ビーズのみで構成された襟飾りが出土している。以上より、ビーズ製襟飾りは素材と色を基準にすると、a:「準貴石や金が用いられた多彩色の襟飾り」、b-1:「複数色のファイアンス製ビーズで構成された襟飾り」、b-2:「単一色のファイアンス製ビーズで構成された襟飾り」に分けることができる。表1ではaとb-1が多いが、実際はb-2の襟飾りも頻繁に副葬されていたと考えられる。なぜなら、ハラガ (Harageh) 遺跡出土の襟飾りを構成したと推測されるビーズを墓ごとに見ていくと、墓一基につき単色のファイアンス製ビーズのみが出土している場合が非常に多いからである。おそらく、本来は青色または緑色ファイアンス製ビーズの襟飾りが副葬されていたのであろう。なお、上述の通り社会的地位や遺跡間の違いは看取できたが、時期による変化は特に見受けられなかった。

5 マスク・人形木棺に表現される襟飾り

前章の分析により、中王国時代において襟飾りは誰もが手に入れることのできる副葬品ではなかったことが分かった。しかしその一方で、壁画や木棺、マスクには極めて頻繁に表現されている。つまり、襟飾りは葬送に際して重要視され、実際に所有できなくとも何らかのかたちで代替しなければならなかったと考えられるのである。では、上記のような媒体にどのように描かれたのだろうか。本章では、特に中王国時代のマスクと人形木棺における襟飾りの図像表現をまとめ、その特徴を明らかにする。そして、出土遺物と比較し、図像と実際の副葬品との間にある共通点および相違点に注目して考察を加える。

(1) 形態と装飾パターン

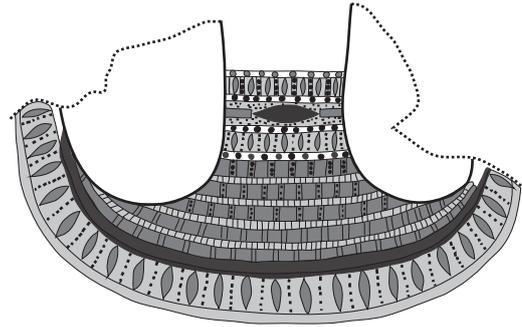
壁画や箱形木棺に描かれた襟飾りは、小さい上に簡略化されてしまっている。そのため、それらの図像資料から装飾の細部まで観察することは困難である。したがって、襟飾りが比較的大きく、細部まで装飾が施されているマスクと人形木棺を対象に、襟飾りの図像表現を詳しく見ていきたい。形態のほか、特に彩色に注目し、襟飾りがどのように表現されていたのかを明らかにする。

本稿では、残存状況が良好で且つカラーで報告されている11点のマスクと7点の人形木棺を対象とする(表4)。これらのほとんどは「ウセク襟飾り」で、いずれも単一色ではなく多彩色で表現されている。最下段の雫形ビーズ列は、全てのビーズが同一色で表現される場合と、複数の色で彩色される場合がある。さらに一つの雫形ビーズが複数

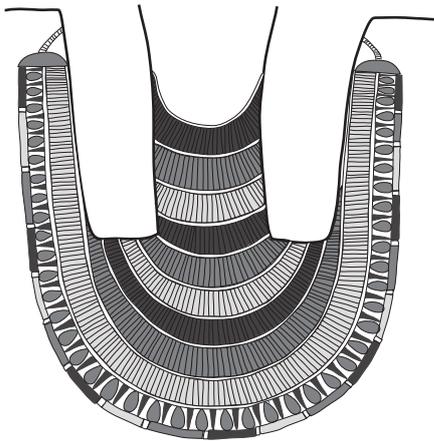
色で彩色されている例も見られる(図7上)。そして、雫形ビーズが描かれた最下段を除くと、同一段中で異なる色が使われている例は皆無に等しい。また、ターミナルの形状は、やはりハヤブサ頭形よりも半円形が圧倒的に多いことが判明した。ハヤブサ頭形のターミナルが表現されているのは本資料中3例のみで、いずれも中部エジプト地域の中王国時代初頭と中王国時代後半に年代付けられる墓から出土している。

詳細に見てみると、襟飾りの図像表現は形態や彩色パターンから、[1] 多装飾の襟飾り、[2] 錘付きウセク襟飾り、[3] 青色基調のウセク襟飾りの大きく3種類に分けることができる(図5)。まず[1]は、中部エジプト地域の中王国時代初頭の墓から出土したマスクに描かれた襟飾りに当てはまる。通常の「ウセク襟飾り」よりも装飾が多く、雫形ビーズが上段にも見られる。そして、円筒形・雫形ビーズ以外にも、様々な形態のビーズが描かれているのが特徴である。彩色には黄・赤・青・黒色が使われている。次に[2]は、メンフィス・ファイユーム地域と南部エジプト地域における中王国時代前半の墓から出土したマスクに該当する。10段構成の典型的な「ウセク襟飾り」で、最下段の雫形ビーズの下に円筒形ビーズが一行描かれていることや、ターミナルから錘につながる紐が表現されていることが特徴として挙げられる。それぞれ彩色も類似しており、最上段は赤色である。赤色の他には、青色と緑色が彩色に使われている。最後に[3]は、エジプト全土の中王国時代中頃から第13王朝に年代付けられる墓から出土したマスク・人形木棺に描かれた襟飾りで、やはり「ウセク襟飾り」である。しかし、[2]よりも段数が多く、14段から16段で構成されている。そして、彩色には[2]と同じく赤・青・緑色が用いられているが、中には青色を基調とした特定のパターンが観察できるものがある。というのも、メイル (Meir) 遺跡から出土したハピアンケトフィ (Hapiankhtifi) の人形木棺、ダハシュール北 (Dahshur North) 遺跡から出土したセヌウ (Senu) のマスク、ベニ・ハサン (Beni Hasan) 遺跡から見つかったウセルハト (Userhat) の人形木棺、ミルギッサ (Mirgissa) 遺跡から出土したイベト (Ibet) のマスクに描かれた襟飾りは、円筒形ビーズ列が表現された部分の彩色パターンが全く同じなのである¹⁵⁾。この種類には、雫形ビーズの下に円筒形ビーズ列は無く、ターミナルから錘につながる紐も表現されていない。

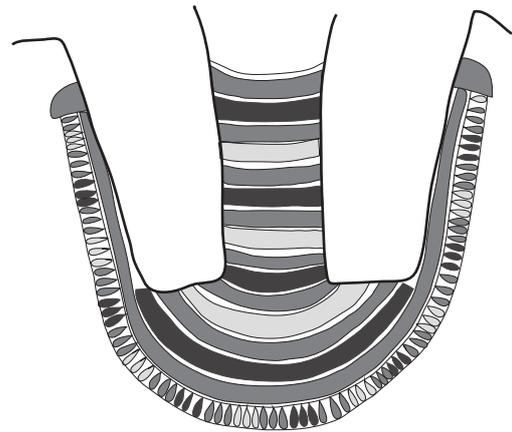
以上のように、マスク・人形木棺に描かれた襟飾りには、多彩色による表現などエジプト各地で共有される要素があったことが窺える。また、時期によって細部に違いがあることも判明した。特に中王国時代後半から第13王朝にかけては、共通の彩色パターンが確立されつつあったよ



[1] 多装飾の襟飾り



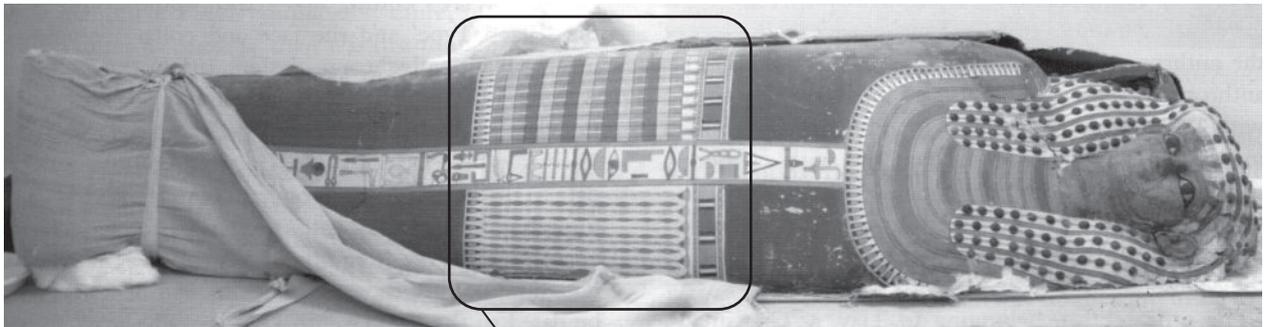
[2] 垂付きウセク襟飾り



[3] 青色基調のウセク襟飾り

図5 襟飾りの図像表現における分類

(D'Auria, Lacovara and Roehrig 1988; Firth and Gunn 1926; Baba and Yoshimura 2010 掲載写真をもとに筆者作成)



「下エジプト王様式の衣装」を構成するビーズエプロン

図6 人型木棺に描かれた「下エジプト王様式の衣装」(Baba and Yoshimura 2010: 11 より。一部加筆)

うだ。そして、このような時期による変化はエジプト全土で同様に見られる。しかし、中王国時代初頭の中部エジプト地域だけは例外で、[1] と上記の3種類に該当しない図像表現が施された¹⁶⁾。おそらく、当該時期・地域では、独自の図像表現が採られていたと考えられる。これを除くと地域による違いは見られず、地理的に隔たりのある場合でも、同時期の図像表現には共通性が看取できたのである。

中王国時代には、「下エジプト王様式の衣装」と呼ばれる王族や地方の有力者の墓からしか出土しない衣装が存在した (Patch 1995; 山崎 2015: 68)。しかし、実際の副葬品としては出土しないものの、王族や有力者ではない被葬者の人形木棺に図像として描かれた例が見られる (図6)。よって、彼らは葬送において理想的な物を図像として表現する習慣があったと考えられる。

そして、これは襟飾りにも当てはまるであろう。襟飾りの場合は、王族や地方有力者以外の墓からも実物が多数出土する。しかし、理想的な形態・彩色は、図像に示されたのではないだろうか。そうであるとすれば、これまで述べてきた襟飾りの図像表現には、襟飾りに対する当時の「理想形」が反映されていたと捉えられる。

では、そのような性質を帯びていたと考えられる図像表現と実際に出土した襟飾りには、どの程度類似性が見出せるのだろうか。

(2) 出土遺物との比較

ここでは、マスクと人形木棺に示された図像表現を襟飾りの「理想形」と位置づけ、前章でまとめた実際に出土した襟飾りとの比較をおこなう。

まず、図像表現では同一段中で異なる色は使われないということであったが、出土遺物においても、やはり同一段中で用いられるビーズの素材・色は統一されている。ターミナルの形状に関しても、図像表現と出土遺物ともに半円形ターミナルが最も一般的だということであった。これら共通点が挙げられる一方、ビーズの配列や色において、図像表現 [1] に類似していると言える襟飾りは確認されなかった。図像表現の彩色に関しては、特に [2] と [3] においてそれぞれある程度共通するパターンが見出せたが、実際に出土した襟飾りの配色は被葬者ごとにばらつきがあり、そのような傾向は見られない。そして、図像表現では [2] から [3] へと時期的な変化が看取されたが、出土遺物にはそのような変化はあらわれていない。また、図像表現では襟飾りを構成するビーズ列の段数は10段以上が一般的であったが、実際に10段以上で構成された襟飾りは極めて稀である。以上が全体的に見た共通点および相違点である。

前章でおこなった襟飾りの種類に関する分析において、ビーズ製襟飾りは素材と色を基準にすると、a:「準貴石や金を用いられた多彩色の襟飾り」、b-1:「複数色のファイアンス製ビーズで構成された襟飾り」、b-2:「単一色のファイアンス製ビーズで構成された襟飾り」に分けることができた。この分類を踏まえ、続いてビーズ製襟飾りの種類ごとに図像表現との類似度を見ていきたい。特に、図像表現 [2] と [3] に共通する赤、青、緑色という基本的な彩色に注目する。まずビーズ製襟飾り a には、紅玉髄、ラピスラズリ、トルコ石、金、銀のうち2種類以上がビーズに用いられている場合が多く、多彩色という点で図像表現と類似していると言える。一般的に紅玉髄は赤色、ラピスラズリは青色、トルコ石は緑または青緑色であるため、[2] や [3] の図像表現における基本的な彩色との類似度も高い。ダハシュールの王女の墓からは、紅玉髄、ラピス

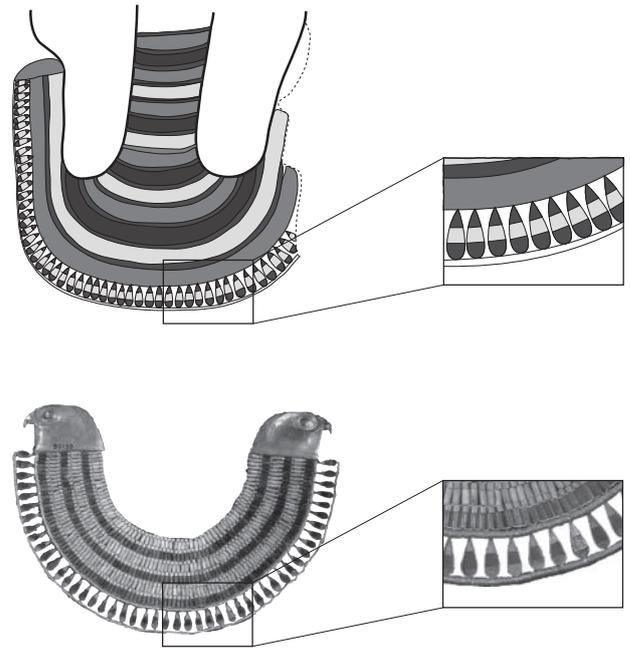


図7 図像(上)と出土遺物(下)に見られる
3色で構成された雫形ビーズ
(Baba and Yoshimura 2010; Andrews 1990
掲載写真をもとに筆者作成)

ラズリ、トルコ石全てが用いられた襟飾りが出土している。さらに、図像では最下段に表現された雫形ビーズ一点一点が複数色で彩色されている例があったが、ビーズ製襟飾り a に分類された中でも同様のビーズが最下段に配列されているものがある。実際には、象嵌によってそのようなビーズが製作されていたようである(図7)。次に、ビーズ製襟飾り b-1 は a と同様に多彩色のビーズで構成されているものの、基本的に黒・白・緑あるいは青色の3色のビーズで構成されている。これは、図像表現の基本的な彩色とは異なっている。最後に b-2 は、単一色のファイアンス製ビーズでのみ構成されているため、形態を除いて図像資料との類似度は極めて低い。

以上のように、主に王族に属したビーズ製襟飾りには、使われているビーズの色と図像表現に関連性が看取できた。他方、準貴石や金が織り込まれていない襟飾りは、円筒形ビーズと雫形ビーズで構成され、同一段中でビーズの色が統一されているという図像表現における基本的な「規則」には倣っているが、配色に関しては図像表現との類似度が低いことが判明した。

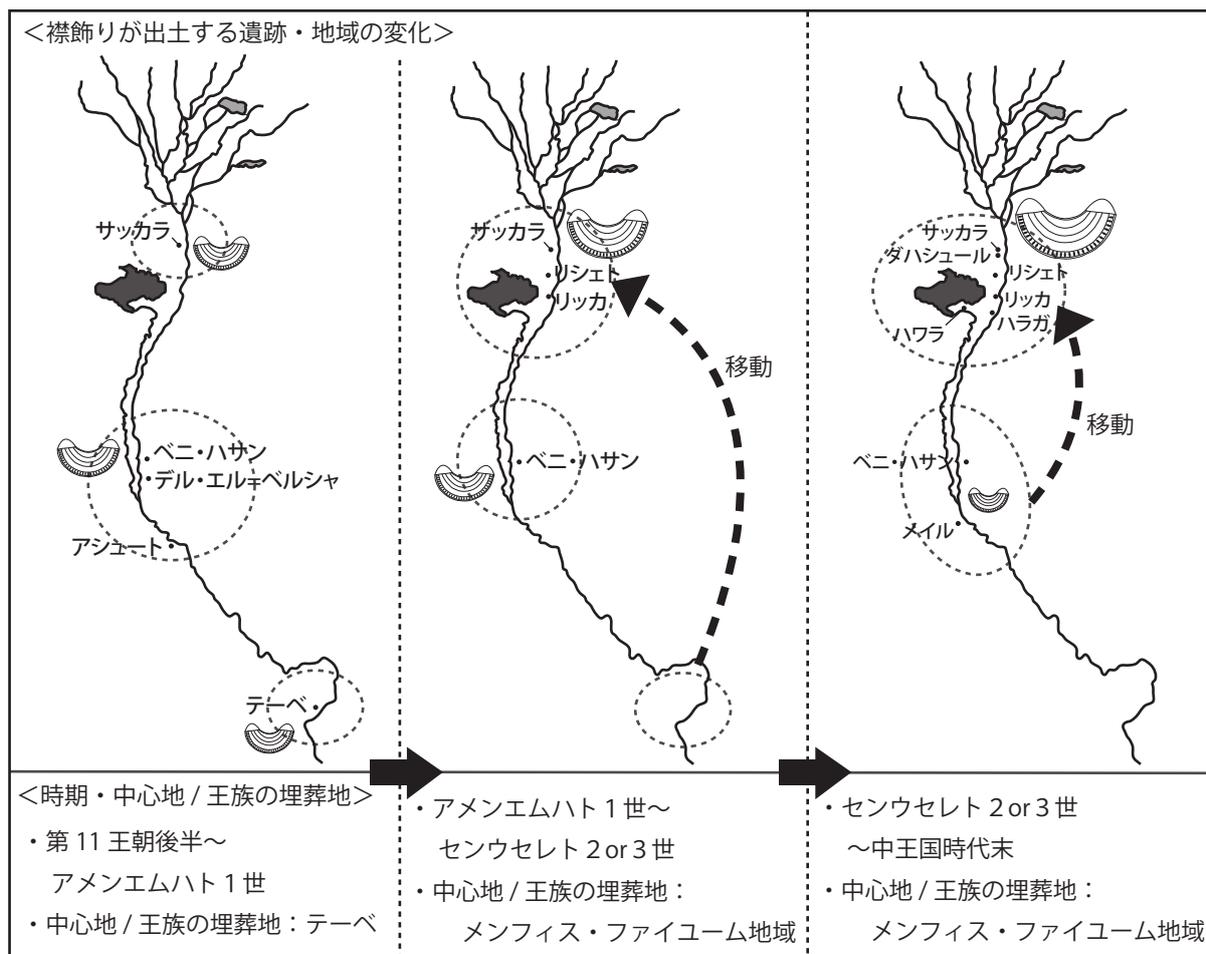


図8 襟飾りの出土遺跡・地域の変化と歴史的背景との関係性 (筆者作成)

6 考察：襟飾りに見られる副葬品選択と王族による統制
本章では、中王国時代における襟飾りの特質を整理した上で、襟飾りに見られる副葬品選択の一側面を考える。

まずは、襟飾りと王族の埋葬地の移動や政治的側面との関連性について検討したい。中王国時代は南部エジプト地域のテーベを中心地として開闢し、当初王墓はテーベに造営された。確かに上記の分析結果(図3)では、中王国時代初期のテーベにある墓から少数ながら襟飾りが出土している。しかし、当該時期にはまだ強力な中央集権は図られておらず、中部エジプト地域など地方に有力者が存在していた。襟飾りの出土地もこれを反映した様相を見せている。そして、アメンエムハト(Amenemhat)1世治世に中心地および王族の墓地がメンフィス・ファイユーム地域へ移動すると、南部エジプト地域における襟飾りの出土墓が見られなくなり、メンフィス・ファイユーム地域の出土墓数が増加する。中王国時代後半になっても南部エジプト地域からの出土例は確認されず、対してメンフィス・ファイ

ユーム地域からはますます多くの襟飾りが出土するようになるのである。この頃になると、中部エジプト地域とメンフィス・ファイユーム地域間の襟飾り出土墓数にも大きな開きが出てくる。さらに、中王国時代前半に中部エジプト地域でのみ出土例があったハヤブサ頭形ターミナルが、中王国時代後半にはメンフィス・ファイユーム地域からのみ出土するようになるのである。これらのことから、センウセレット3世治世頃起きた中央集権化¹⁷⁾の影響で、中部エジプト地域の襟飾りも、メンフィス・ファイユーム地域に移動した可能性が考えられる。このように、中王国時代における襟飾りの出土傾向と王族の埋葬地や政治的背景との間には関連性が指摘できる(図8)。一連ビーズ製装身具は地域・時期問わず普遍的に出土する(山崎 2015: 65-66)のに対して、襟飾りは王族の埋葬地と密接に関係し、さらに政治的側面からの影響も受ける装身具であったと言える。

以上を踏まえて、襟飾りと「宮廷様式の埋葬」に含まれる副葬品の組み合わせから、センウセレット2世治世以降の

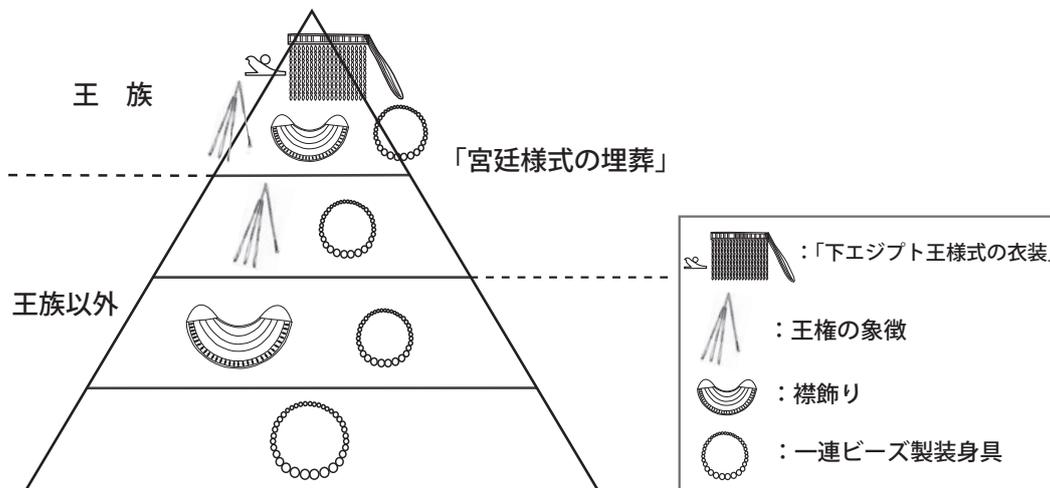


図9 中王国時代中頃～末期のメンフィス・ファイユーム地域における副葬品選択の様相 (一部に Lacau 1904; Mace and Winlock 1916 掲載図版を引用)

メンフィス・ファイユーム地域における副葬品選択の一側面を見てみたい。分析の結果、上記の副葬品の組み合わせは、被葬者が属した社会階層によって異なることが分かった。まず、王族は「宮廷様式の埋葬」に含まれる「下エジプト王様式の衣装」と王権の象徴に加え、襟飾りを副葬品として所有している場合が多い。他方、王族以外はそれら一揃いの中から取捨選択をしていた様子が窺えた(図9)。その取捨選択は様ではなく、王権の象徴を重要視した人々(表3)、襟飾りを重要視した人々、どちらも所有していない人々に分けられる。王権の象徴が副葬品として利用された埋葬は「宮廷様式の埋葬」と呼ばれ、オシリス神(Osiris)化を目指した埋葬形態であるとされる(Miniaci 2011: 2)。主に王族の埋葬に当てはまり、王族以外で「宮廷様式の埋葬」に該当する人々(表3)は極めて少数であることから、彼らは身分が高く王族に近い存在であったと推測できる。そのため、王権の象徴は襟飾りよりも副葬品としての価値が高かったと考えられる。しかしながら、上述の通り襟飾りには王族の埋葬地や政治的側面からの影響を受けていた様子が窺えた。また、本稿の資料中ではハラガ遺跡出土の襟飾りが最も多い(図3)が、これは王による事業に従事した裕福な人々が利用した墓地(Engelbach 1923: 9; Richards 2005: 93)という当該遺跡の特徴がその要因として挙げられる。したがって、襟飾りは王権の象徴には及ばないものの、王族の衣装の一部として認識され、比較的社会階層の高い人々に副葬品として選択されていたのではないだろうか。

なお、一連ビーズ製装身具はどの遺跡においても広く副葬品として利用されており、王権の象徴と襟飾りのどちらも副葬されていない墓からも出土している。襟飾りと比

べ、比較的アクセスが容易な装身具であったのだろう。

本稿では、襟飾りの図像表現を整理し、出土遺物との比較検討もおこなった。まず、マスクと人形木棺に描かれた襟飾りの図像表現をまとめたところ、中王国時代前半の中部エジプト地域を除いて地域性はほぼなく、エジプト全土で表現方法が共有されていた。また、時期によって図像表現の細部に変化が見られるが、地理的な隔たりがあったとしても各地で同様の変化が起こっていた(図5、表4)。エジプト全土で共有された表現方法の一つには、赤、青、緑色による彩色が挙げられる。

そして、「下エジプト王様式の衣装」が王族以外の人形木棺に描かれた例(図6)を挙げ、古代エジプト人は葬送において理想的な物を図像として表現する習慣があったと推測した。同様に、襟飾りの理想的な形態・彩色も図像に示されたと考えた。これらの前提に基づき比較をおこなった結果、図像表現に最も近いのは、希少価値の高い素材で構成された王族とその他ごく一部の墓出土の襟飾りで、それ以外は形態を除くと図像表現との類似点が見られないことが判明した。

J. リチャーズ(Richards)は、準貴石や金・銀で製作された副葬品がハラガ遺跡、リッカ遺跡、アビュドス(Abydos)遺跡の幅広い社会階層の墓から出土していることから、厳しい行政の支配を受けず自由な経済活動を行えた人々の存在を指摘している(Richards 2005: 176)。しかし、本稿ではリチャーズの主張とは異なる側面が看取された。王族と王族以外に属した襟飾りの素材には差異があり、図像に示された理想的な襟飾りを副葬できた人々は、非常に限られていたのである。また、上述の通り襟飾りの出土墓数は少数で、その出土傾向は政治的側面と関連していた。これら

のことから、襟飾りの副葬には、王族による管理・操作があったと言えよう。特に、図像表現と近似する襟飾りの所有には、厳格な統制が図られていたと推測できる。王族以外に属した襟飾りを除く装身具には、比較的準貴石や金が多用されており（山崎 2015: 75-78）、これは他の装身具と比べて襟飾りの素材に対する制限が厳しかったことを示している。「理想形」が図像としてエジプト全土で共有されていた一方、それを実物にどれだけ反映できるかという点において、王族は差異を生じさせようとしたのではないだろうか。また、「下エジプト王様式の衣装」が専ら王族の墓から出土することも、王族による一部の副葬品に対する統制の傍証となる。これは、リチャーズの言説とは若干異なる様相を帯びており、実際の副葬品選択には、地域・社会階層によって一定の制限があったと考える。

7 おわりに

最後に、本稿で得られた見解をまとめ、今後の展望と課題を示したい。

本稿では、これまであまり具体的な議論がされてこなかったエジプト中王国時代の襟飾りについて、出土遺物と図像資料の仔細な分析を通して考察をおこなった。その結果、まず襟飾りの出土墓数は極めて少数で、誰もが所有できる副葬品ではなかったことが判明した。また、襟飾りの出土傾向と王族の埋葬地あるいは中心地の移動との間には、関連性があったことが明らかとなった。これは、別稿において指摘した襟飾りは王族と密接に関係する装身具で、比較的社会階層の高い人々に選択される副葬品であったという論を補強する。さらに、襟飾りの図像表現と近似していたのは主に王族の襟飾りで、その他襟飾りは形態を除いて図像表現とは大きく異なっていることが分かった。襟飾りを副葬品に選択した人々の中でも、図像に示された理想的な襟飾りを副葬できるかという点には、差異が見られたのである。

これらのことから、襟飾りの副葬には、王族による厳格な統制が図られていた可能性を指摘した。中王国時代における副葬品選択は、完全に自由であったわけではなく、王族による統制のもと、社会階層や地域によって一定の制限の中でおこなわれていたと考えたのである。

今後は、襟飾り以外の装身具と図像表現との比較をおこない、中王国時代における装身具利用および副葬品選択についてより深く追究していきたい。古代エジプトでは、様々な媒体に装身具が描かれたため、それらを丹念に観察し整理することで、当時の人々の各装身具に対する捉え方を描出できよう。そして、実際に出土した装身具と比較することによって、副葬品選択における取捨選択の様子が読み取れると考える。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、早稲田大学文学学術院の近藤二郎教授にご指導をいただきました。また、早稲田大学文化構想学部助教の馬場匡浩先生と早稲田大学エジプト学研究所の矢澤健氏には、原稿を読んでいただいた上で多数の有益なアドバイスを賜りました。そして、査読を引き受けてくださった先生方からも、多角的な視点からのご指摘や助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

註

- 1) D.C. パッチ (Patch) によると、「下エジプト王様式の衣装」とは、ビーズ製エプロン、尻尾、垂れ布 (hip drape)、ツバメ形ペンダントで構成される伝統的な王の衣装である (Patch 1995)。主に図像として表現され、最古の例がナルメル王のパレットに見られる。中王国時代には、図像としてだけではなく「宮廷様式の埋葬」から実物が出土するようになる。
- 2) 「宮廷様式の埋葬」とは、王家の女性に代表される埋葬形態を指す (Grajetzki 2010: 92)。副葬品は王権の象徴が中心であり、笏、棍棒、杖、穀竿、短剣、弓、矢などが含まれる。さらに、「下エジプト王様式の衣装」や聖水を入れるための石製容器などが副葬されている例も見られる。また、G. ミニアッチ (Miniaci) は王族以外の墓にも「宮廷様式の埋葬」が見られることを指摘し、「オシリス神化 (“Osirification”）」の埋葬と言う方がよりふさわしいと述べている (Miniaci 2011: 2)。
- 3) 多数のビーズを単純に連ねただけの首飾り、腕輪、足輪を本稿では「一連ビーズ製装身具」と呼称する。
- 4) 幅広腕輪とは、主に円筒形ビーズを複数段連ねることで幅を作り出した腕輪で、ビーズの位置を固定させるためにスペーサーと呼ばれる特殊なビーズが頻繁に用いられた。
- 5) ターミナルとは、ビーズの束をまとめるために襟飾りの両端に付属した大型のスペーサーである。半円形やハヤブサ頭形が一般的であるが、新王国時代には三角形や蓮の花を象ったターミナルも利用された。
- 6) 本表中の時期の項目において、「アメ1」はアメンエムハト1世治世時代、「アメ3」はアメンエムハト3世治世時代、「セン1」はセンウセレト1世治世時代、「セン3」はセンウセレト3世治世時代を指している。
- 7) 同一墓から襟飾り用ビーズが複数点出土している場合は、いくつかの襟飾りに属していたのが不明であるため、最低数の1点でカウントする。また、同一墓からターミナルが複数点出土している場合は、ターミナルの底部に穿孔箇所がいくつあるかで判断する。つまり、同数穿孔箇所があれば同一個体として見なし、異なった場合は違う襟飾りとしてカウントするということである。
- 8) 本稿における地域区分は、J. ボリオ (Bourriau) によるもの (Bourriau 1991: 5) を参考としている。
- 9) 装身具本来の形状が不明なビーズのみが出土した墓も含めて筆者が集成した際の墓数である。
- 10) 出土傾向の分析にあたっては、各地域における襟飾りの出土割合を示すべきであるが、ハラガ遺跡やリッカ遺跡など一部を除くと、各遺跡の総墓数を提示することは発掘報告書の精度上困難な場合がある。ここでは、参考として襟飾り以外も含む「装身具が出土した墓の総数」を地域ごとに示しておきたい。まず、メンフィス・ファイユーム地域は196基、中部エジプト地域は67基、南部エジプト地域は91基である。
- 11) Grajetzki 2010: 96-102に17基が挙げられており、さらに2基が筆者の分析によって追加された。

- 12) ここでは、完形の一連ビーズ製装身具だけではなく、球形ビーズなど一連ビーズ製装身具を構成したと推測できるビーズも含めている。
- 13) 準貴石とは、ダイヤモンドやルビーなど貴石とされる以外の宝石(鉱物)を指すが、明確な定義付けはされていない。本稿では、紅玉髓、トルコ石、ラピスラズリを総じて準貴石と呼称する。
- 14) リッカ遺跡、ハラガ遺跡、ラフーン(Lahun)遺跡、ベニ・ハサン遺跡の発掘報告書では、しばしばビーズの素材が「色、釉」で表記されており、ファイアンス製ビーズなのか施釉凍石製ビーズであるのか不明瞭な場合がある。この場合本稿では、便宜上ファイアンス製ビーズとして統一する。
- 15) 上段から、青、赤、青、緑、青、赤、青、緑…の彩色パターンで円筒形ビーズ列が表現されている。
- 16) [1] [2] [3] に該当しない図像表現の資料は5点あるが、そのうち3点は中部エジプト地域から出土したマスクに描かれている。なお、他2点はいずれも人形木棺に彩色ではなく象嵌で表現されている。
- 17) 中央集権化のプロセスは、地方有力者の子ども達を王宮で教育し、王への忠誠心を育ませた上で行政の仕事に就かせるというもので、地方有力者は徐々に中心地のメンフィス・ファイユム地域に移動し、当該地のエリートとなった(Franke 1991)。この影響で、センウセト3世治世以降は中部エジプト地域など地方に大型の墓地が造営されなくなり、地方有力者が冠していた称号も見られなくなる。

参考文献

- Aldred, C. 1971 *Jewels of the Pharaohs*. London, Thames and Hudson.
- Andrews, C. 1990 *Ancient Egyptian Jewellery*. London, British Museum Publications.
- Andrews, C. 1994 *Amulets of Ancient Egypt*. London, British Museum Press.
- Arnold, D. 1992 *The Pyramid Complex of Senwosret I: The South Cemeteries of Lisht III*. New York, The Stinehour Press.
- Baba, M. and S. Yoshimura 2010 Dahshur North: Intact Middle and New Kingdom Coffins. *Egyptian Archaeology* 37: 9-12.
- Baines, J. and J. Malek 1980 *Atlas of Ancient Egypt*. Oxford, Phaidon Press.
- Bourriau, J. 1988 *Pharaohs and Mortals: Egyptian Art in the Middle Kingdom*. New York, Cambridge University Press.
- Bourriau, J. 1991 Patterns of Change in Burial Customs During the Middle Kingdom. In S. Quirke (ed.), *Middle Kingdom Studies*, 3-20. New Malden, SIA Publishing.
- Boyce, A. 1995 Collar and Necklace Design at Amarna: A Preliminary Study of Faience Pendants. In B. J. Kemp (ed.), *Amarna Report VI*, 336-371. London, Cambridge University Press.
- D'Auria, S., P. Lacovara and C. H. Roehrig 1988 *Mummies and Magic: the Funerary Arts of Ancient Egypt*. Boston, MFA Publications.
- Eggebrecht, A. 1993 *Pelizaues-Museum in Hildesheim: die Ägyptische Sammlung*. Mainz, Verlag Philipp von Zabern.
- El-Khadragy, M. 2007 Some Significant Features in the Decoration of the Chapel of Iti-ibi-iqer at Asyut. *Studien zur Altägyptischen Kultur* 36: 105-135.
- Engelbach, R. 1915 *Riqqeh and Memphis VI*. London, British School of Archaeology in Egypt and Egyptian Research Account.
- Engelbach, R. 1923 *Harageh*. London, British School of Archaeology in Egypt and Egyptian Research Account.
- Farag, N. and Z. Iskander 1971 *The Discovery of Neferuptah*. Cairo, General Organization for Government Printing Offices.
- Firth, C. M. and B. Gunn 1926 *Teti Pyramid Cemeteries*. Cairo, Imprimerie de l'institut Français.
- Franke, D. 1991 The Career of Khnumhotep III of Beni Hasan and the So-called "Decline of the Nomarchs". In S. Quirke (ed.), *Middle Kingdom Studies*, 51-67. New Malden, SIA Publishing.
- Garstang, J. 1907 *Burial Customs of Ancient Egypt: As Illustrated by Tombs of the Middle Kingdom, A Report of Excavations made in the Necropolis of Beni Hassan during 1902-3-4*. London, Constable & Co.
- Gashe, V. 2007 An Analysis of the Use of Beads and Amulets as a Mortuary Item in Protodynastic Graves at the Upper Egyptian Site of Badari. In K. Griffin (ed.), *Current Research in Egyptology 2007: Proceeding of the Eighteenth Annual Symposium*, 71-82. Oxford, Short Run Press.
- Grajetzki, W. 2010 *The Coffin of Zemathor and Other Rectangular Coffins of the Late Middle Kingdom and second Intermediate period*. London, Golden House Publications.
- Grajetzki, W. 2014 *Tomb Treasures of the Middle Kingdom: The Archaeology of Female Burials*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- Hayes, W. C. 1953 *The Scepter of Egypt I: From the Earliest Times to the End of the Middle Kingdom*. New York, Plantin Press.
- Lacau, P. 1904 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire vol.I*. Cairo, Imprimerie de l'institut Français.
- Mace, A. C. and H. E. Winlock 1916 *The Tomb of Senebtisi at Lisht*. New York, Metropolitan Museum of Art.
- Miniaci, G. 2011 *Rishi Coffins and the Funerary Culture of Second Intermediate Period Egypt*. London, Golden House Publications.
- de Morgan, J. 1895 *Fouilles a Dahchour, Mars-Juin 1894*. Vienna, Adolphe Holzhausen.
- de Morgan, J. 1903 *Fouilles a Dahchour 1895*. Vienna, Adolphe Holzhausen.
- Naville, E. 1907 *The XIth Dynasty Temple at Deir El-Bahari Part I*. London, Published by Order of the Committee.
- Patch, D. C. 1995 A "Lower Egyptian" Costume: Its Origin, Development, and Meaning. *Journal of the American Research Center in Egypt* 32: 93-116.
- Pellerin, F., M. Aubry, D. Percheron, J. Martinez, D. Castelain, M. Gautier and B. Girveau 2014 *Sésostris III Pharaon de Légende*. Gand, Snoeck.
- Petrie, W. M. F. 1907 *Gizeh and Rifeh*. London, Aris & Phillips.
- Petrie, W. M. F. 1914 *Amulets*. London, Aris & Phillips and Joel L. Malter.
- Petrie, F., G. Brunton and M.A. Murray 1923 *Lahun II*. London, Adolphe Holzhausen.
- Quirke, S. 2015 *Exploring Religion in Ancient Egypt*. Oxford, Wiley Blackwell.
- Richards, J. 2005 *Society and Death in Ancient Egypt: Mortuary Landscapes of Middle Kingdom*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Roehrig, C. 2003 The Middle Kingdom Tomb of Wah at Thebes. In N. Strudwick and J. H. Taylor (eds.), *The Theban Necropolis: past, Present and Future*, 11-13. London, British Museum Publications.
- Wegner, J. 2010 Tradition and Innovation: The Middle Kingdom. In W. Wendrich (ed.), *Egyptian Archaeology*, 119-142. West Sussex, Wiley Blackwell.
- Wilkinson, A. 1971 *Ancient Egyptian Jewellery*. London, Methuen.
- Xia Nai 2014 *Ancient Egyptian Beads*. London, Springer.
- 馬場匡浩・坪野 恵 2005 「ダハシュール北遺跡出土のビーズ製品について」『エジプト学研究』13号 64-85頁。
- 山崎世理愛 2014 「オブジェクト・フリーズ (*frise d'objets*) と出土遺物の比較—装身具およびアミュレットを中心に—」『エジプト

学研究』20号 115-129頁。

山崎世理愛 2015「中王国時代の装身具利用からみた埋葬習慣の地域性」『エジプト学研究』21号 59-78頁。

山崎 世理愛

早稲田大学大学院文学研究科修士課程

Seria YAMAZAKI

Waseda University